

令和 4 年 6 月 16 日現在

機関番号：21601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00687

研究課題名(和文) 英語の関係詞節の発話解釈に関する意味的・語用論的原理の記述的研究

研究課題名(英文) Semantic and Pragmatic Studies of Relative Clauses in English

研究代表者

中山 仁(Nakayama, Hitoshi)

福島県立医科大学・看護学部・教授

研究者番号：70259810

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では関係詞節を含む英語表現について、広範な事例分析を通して「文の意味」と「発話の意味」の関係を検討し、発話解釈における主節と関係詞節の相互作用を意味的・語用論的に分析した。その結果、特に非制限的關係詞節の発話解釈において成果を上げることができた。第1に、リアルタイム性(会話の場と瞬時の情報処理が要求される状況)がWhich節の生起する環境に適していること、第2に、Which節は話題化文と同様の談話機能を持ち、それがWhich節の話し言葉における生起を動機づけていること、第3に、Whichは指示特定の手続き上、it, thatとは異なる特徴を持っていること、の3点を確認することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

関係詞節の研究に語用論的アプローチを導入すること、すなわち、主節、関係詞節、および、関係詞、先行詞それぞれの情報とその他のコンテキストに基づいて、話し手の意図した方向に聞き手の解釈を導くための推論プロセスに注目することは、関係詞節だけでなく、接続詞などの接続要素によってつながれた文や節の発話解釈とも比較検討できることを意味する。文連結の語用論的特徴と整合する関係詞節の解釈プロセスを示すことができれば、関係詞節の解釈に関する一般化にも妥当性を与えることが期待できる。

研究成果の概要(英文)： The aim of the research is to examine semantic and pragmatic relationships between the English relative clause and the main clause based on a variety of case studies. It focuses mainly on the utterance interpretations of the nonrestrictive relative clause and its relative pronoun "which."

The research has found that three characteristics are involved in the use of the nonrestrictive "Which" clause that appears as an independent clause. First, the "Which" clause is more likely to be used in a conversation because of several features compatible with the environment where real-time, time-limited information processing is required. Second, the independent "Which" clause has similar discourse-functional properties to the topicalized sentence, which is common in spoken English. Third, the relative pronoun "which" has different referential properties from the synonymous pronouns "it" and "that," and they cause "which" to have its own way of expressing the speaker's intentions.

研究分野：英語学、言語学

キーワード：関係詞節 語用論

### 1. 研究開始当初の背景

本研究代表者(報告者)はこれまで主節と関係詞節の連結関係について意味的・語用論的観点から考察を行ってきた。特に、先行詞の内容を限定していないと思われる「非制限的な制限節」と、主節と関係詞節の間に音調上の区切りやコンマのない「制限的な非制限節」に注目し、一般的な制限節・非制限節との関係を探った。その結果、主節と関係詞節には「必然性」「情報の重要度」「限定性の希薄化」という概念に基づく意味的・語用論的な連結関係があり、それを背景として節同士の連結の緊密度に段階性が生じることが説明できた。

しかし、上記の概念には不備があり、意味論的必然性と語用論的必然性の区別、前提となる情報と話し手の意図との関係、限定性の定義などの点が明確になっていない。それには、発話時点におけるコンテキストの相互作用と推論プロセスにも注目していく必要がある。

また、先行詞の指示的意味、関係詞の連結詞としての役割とその含意についても検討が必要である。特に関係詞は「概念的意味」と、推論の仕方に影響を及ぼす「手続き的意味」を合わせ持つ存在なので、関連性理論に基づいたアプローチが有効であると考えられる。

以上の検討課題を遂行することは、関係詞節の解釈における意味論と語用論の接点の解明に役立つ。また、本研究で扱う「非制限的な制限節」や「制限的な非制限節」などの一見例外的な表現の発話分析は、英語学習者が英文と英語らしさの理解を深めるための情報に接する機会となる点でも有益である。

### 2. 研究の目的

本研究では、談話機能上の関係詞節の性質について、制限節・非制限節の二項対立にとらわれない次元すなわち語用論における解釈の観点から分析を進め、従来の分析の問題を解消することを旨とする。

本研究における学術的「問い」は、「主節+関係詞節」の統語・意味構造のどの部分が発話解釈に利用され(発話解釈の入力となり)、そこにどのような情報(コンテキストを構成する知識・記憶・命題)が加わり、そこからどのような推論が働いた結果、聞き手の理解に至るのか、というものである。この問いの中には、「文の意味すなわち意味論的意味と見なされてきたものは、すべてが真に意味論の領域で処理されるべきなのか、それとも、部分的に語用論の領域で処理されるべきなのか」という問いも含まれる。

文の意味と発話の意味を分けて考えれば、制限節と非制限節を同じレベルで扱うことも可能となる。これによって、これまでしばしば例外あるいは特異例として取り上げられてきた「非制限的な制限節」や「制限的な非制限節」は、統語的な制限・非制限の観点から離れて、主節と関係詞節とコンテキストの相互作用を考慮に入れることによって、話し手の意図を適切に反映させるための自然な発話形式であると認識できるようになる。

本研究では、このような問題を解決するのにふさわしい説明基盤として、発話解釈理論の1つである関連性理論に基づくアプローチを用い、関係詞節の発話解釈の解明に役立てる。

### 3. 研究の方法

本研究では上記(2)に記した主たる目的を達成するために、以下を目標とする。

(1) 制限的な関係詞節と非制限的な関係詞節の中間に位置する「非制限的な制限節」と「制限的な非制限節」に注目し、両関係詞節が「統語上は異質であるのに解釈上は同質」である事実に基づいて、これらを同一の次元で扱う部門が必要であることを明らかにする。

(2) 主節と関係詞節という2つの節の連結関係を坪本(1986)による「文連結の一般原理」に沿って再考し、関係詞節の解釈を語用論のレベルで説明するための理論的根拠を示す。

(3) 「主節+関係詞節」の発話意図を読み解くために、先行詞の指示的意味、主節と関係詞節が表す命題間の意味関係、話し手の持つ前提や聞き手との共有知識を含めたコンテキストとの相互作用、および、それらから導出される推論のプロセスを解明する。

(4) 関連性理論に基づいて「文の意味」と「発話の意味」を峻別し、関係詞節の発話の関連性を明らかにすると同時に、関係詞の持つ概念的意味(真理条件に關与する意味)と手続き的意味(推論への制約を課す情報)の検討を行う。

(5) その他の関係詞節への応用として、定義文に用いられる when 節(*e.g. Frustration is when you can't find the car keys.*)の発話解釈プロセスが関連性理論に基づいて説明できることを示す。

### 4. 研究成果

#### (1) 主な成果

非制限的な関係詞節のうち、以下のような主節に埋め込まれずに独立して生じる Which 節および成句的表現である Speaking of which の生起理由について、英語の話し言葉の一般的特徴、Which 節の統語的特徴と付随する機能上の特徴、Which 節の語用論的特徴、関係詞 which と類義の代名詞 it/that との指示機能上の違い、の4点から分析を行った(以下、Speaking of which も含めて Which 節と呼ぶことにする)。

- (a) A: Well the good news for the environmentalists is the bike runs on unleaded.  
 B: Mhm.  
 A: *Which is good news*. Cos like that 's not so expensive.  
 (Biber et al. 1999: 223)
- (b) 'We can take one or two clouds on our Christmas cheer... *Speaking of which*, where 's Bill? I want to wish him season 's greetings.' (BNC Online)

非制限的關係詞whichは書き言葉に多いものの、このWhich節は会話や非常にくだけた書き言葉でもよく用いられる。これについてBiber et al. (1999) は、独立して使用される他の従属節の例 (Because節) と同様、会話の持つ「話題が発展しやすい」という性質が関わっていると指摘するが、それだけではなぜWhich節が会話で使用されやすいのかを十分説明したことにはならない。

そこで、本研究では、上記 ~ の点から話し言葉の特徴とWhich節自体の特徴とを関連づけることによって、Which節の生起理由についてより具体的な説明を試みることにした。

では、話し言葉のいくつかの一般的特徴、中でも「リアルタイム性」がWhich節の発話の動機づけとなっていることを示した。「リアルタイム性」とは、その場で共有される時間の流れの中で話し手がことばを産出し、聞き手がその場でそれを理解することを言う。Carter and McCarthy (2006: 168) によれば、それは「その場で思いついた発話で、事前に準備しておく余裕のない」状況での発話を生みやすい。リアルタイム性は限られた時間内での発話の形式と内容に影響を及ぼす要因の1つとなる。本研究で「リアルタイム性」と言う場合は、特に「限られた時間内で発話を理解し、それを受けて次の発話を産出しなければならない状況にあること」を指している。

では、話題化文との類似性、では話し手の意識について取り上げ、話し言葉の特徴との関わりについて議論した。では、Which節の關係詞WhichがIt/Thatと異なる指示特性を持つことを、話し言葉の主な特徴の1つであるリアルタイム性の観点から考察した。

その結果、(i)Which節はリアルタイム性を反映する文体的特徴を多く持つ、(ii)Which節は、話し言葉に特徴的な構文である話題化文と共通した特徴を持つ、(iii)Which節は発話時の話し手の意識が反映されやすい、(iv)關係詞Whichの指示特性はリアルタイムの発話にとって有効である、という主に4つの特徴が話し言葉での生起をもたらししていることが明らかになった。

(i)の具体例が(c)である。(c)では、話し手Aによる「彼」の容態に関する発話を指して、話し手BがWhichで受けたものの、Bにはその発話の意味がすぐに理解できず、Aに質問の形で返している。Aの発話内容を十分消化しないうちにとりあえず受けてしばらく考えるために冒頭でWhichが発話されたものと捉えることができる。

- (c) A: I think he has a partial tear on one of his lungs, maybe other internal organs.  
 B: *Which... which means what?*  
 A: It means that he needs surgery. (COCA, 2010, TV)

(ii)については、(d)のような話題化文と(e)のWhich節との対照から、談話機能の類似性、および、代名詞的要素の使用の点に注目し、話題化文と同様にWhich節が話し言葉で使用されやすいことを明らかにした。

- (d) I put in the day on the job, which I like, and I go home at night. *That I also like*. (Biber et al. 1999: 900)
- (e) Then he offered me an additional \$2,000 if I could convince her. *Which I did*. (COCA, 2001, MOV)

(iii)については、Which節が、先行発話の発話時点において、その発話をきっかけに聞き手の側に新たな想定(関連性理論等と言う assumption)が生じた場合に生起しやすい例に基づいて検討した。(f)はspeaking of whichによって新たな想定が生じたことを示している例と捉えることができる。

- (f) REVA: (...) I mean, I know it 's the kid that 's on trial, but Mr. Spaulding really seems to be the one that they 're going after. GRACE: Don 't you worry about Mr. Spaulding. Oh, *speaking of which*, I have to get back. It was nice talking to you. (SOAP, 2008 (早瀬 2017))

(iv)については、whichと代名詞it/thatとの共通点と相違点を機能的、語用論的観点から検討することによってwhichの指示特性を抽出した。その結果、Which節のwhichは、その代名詞的な性質ゆえにit/thatと共通した指示特性を持つ一方で、それ自体で独特の指示特性を持つことが分かった。これを神尾ら(1990, 1999)による代名詞の機能上・語用論上の指示特性に沿っ

て言えば、which は必ずしも既獲得情報 (= 話される以前から、話し手が既に獲得していた情報) を指す必要はなく、指示集中的である (= その場で指していることだけに注意が向けられている) 必要もない。中でも、指示対象が話し手にとって既獲得情報でなく、which が指示集中的でないことが it/that との違いを際立たせる which の特異な一面であると言える。また、その特異性が現れやすい状況としては、その場で示された未処理の情報を受け、その情報とは別のことにも注意を向けながら会話を進めるような場合であることも確認した。

## (2) 今後の展望

上記の通り、非制限的關係詞 which の語用論的推論に関して一定の成果を上げることはできたが、これを関連性理論の「手続き的コード化」(Blakemore 1987) の観点から一般化し、關係詞が推論の方向性にどのように貢献しているか明らかにするまでには至っていない。非制限的關係詞の手続き的情報については Blakemore (1992) にわずかに言及されているが、概念的情報も考慮に入れた關係詞の関連性については言及がないので、これを本格的に検討する余地が残されている。今後は、關係詞を語用論的観点から捉え直し、前後の発話をつなぐための推論に貢献する存在としての關係詞の価値をより明確に打ち出すことに焦点を当て、研究を進展させたい。

## 参考文献

- Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad and Edward Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*, Pearson Education.
- Blakemore, Diane. 1987. *Semantic Constraints on Relevance*, Blackwell.
- Blakemore, Diane. 1992. *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*, Blackwell.
- Carter, Ronald and Michael McCarthy. 2006. *Cambridge Grammar of English*. Cambridge University Press.
- 早瀬尚子. 2017. 「従属節からの語用論的標識化：発話動詞関連の懸垂分詞構文がたどる新たな構文への道」西原哲雄等 (編) 『現代言語理論の最前線』231-248. 開拓社.
- 神尾昭雄. 1990. 『情報のなわばり理論 言語の機能的分析』大修館書店.
- Kamio, Akio and Margaret Thomas. 1999. "Some Referential Properties of English *It* and *That*," in Kamio, A. and K. Takami (eds.), *Function and Structure: In Honor of Susumu Kuno*, 289-315. John Benjamins.
- Sperber, Dan & Deirdre Wilson. 1986/95. *Relevance: Communication and Cognition*. Blackwell.
- 坪本篤朗. 1986. 「and と ト -- 文連結のプロトタイプと範疇化」林四郎 (編) 『応用言語学講座第2巻：日本語と外国語』172-97. 明治書院.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 中山仁	4. 巻 38
2. 論文標題 話し言葉に特徴的な非制限的Which節の機能的・語用論的分析	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 英語表現研究	6. 最初と最後の頁 107-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中山仁	4. 巻 24
2. 論文標題 文頭の非制限的關係詞whichの指示特性に関する機能的・語用論的考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 福島県立医科大学看護学部紀要	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中山仁	4. 巻 76
2. 論文標題 話し言葉に特徴的な非制限的Which節の生起要因	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本英語表現学会プレティン英語表現研究	6. 最初と最後の頁 9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中山仁
2. 発表標題 話し言葉に特徴的な非制限的Which節の生起要因
3. 学会等名 日本英語表現学会第49回全国大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------